

民映研作品総覧

1970-2005

日本の基層文化を撮る

【編集】 民族文化映像研究所

【発行】 はる書房

本書は、一九九六年に民映研（民族文化映像研究所の略称）によって刊行された『民族文化映像研究所作品総覧』（新装版）と、二〇〇一年に発行された増補版をもとに復刊したものである。

新版刊行にあたって

『民族文化映像研究所作品総覧』は、民映研（民族文化映像研究所の略称）が一九八九年に作品番号⑫までの初版を、九六年には作品番号④⑦までを追加した新装版を発行し、二〇〇一年には作品番号⑪⑦までの収めた増補版を発行しました。二〇二一年版となる今回、はる書房が発行元となり作品番号⑪⑨までの16mmプリント作品全てが網羅された作品総覧を上梓できました。とてもありがたいことです。テキストはオリジナルのまま、写真は16mm作品本編よりカラーで数点ずつ掲載としました。映画を見ることが叶わなくとも楽しめる一冊になりました。

志を備えた三人、姫田忠義、伊藤碩男、小泉修吉が集い、活動を始めた一九六一（昭和三六）年から六〇年の年月が過ぎ、一九七六（昭和五一）年七月一日「民族文化映像研究所」という名を得てからでも四五五年の歳月となりました。作品総覧に載る作品は、一九七〇年から概ね二〇〇〇年までに制作された作品。一九九〇年代初頭のバブル崩壊期までの好景気に支えられています。当時は日本にも文化事業を支える経済と土壌がありました。お陰で無形の文化を数多く記録できたのです。

そして年号は令和です。一一八本の作品群は、今見ると制作当時とはまた違った性格も帯びて来ました。二〇一一年三月十一日の東日本大震災以降、民映研作品レンタルDVDの希望者が増えました。ひとつひとつの作品を鑑賞することよりも、民映研作品に撮られ記録された何かを見るために借りていかれます。日本は好景気の時期に、多くの大切なモノを忘れ失いました。それから二〇年近く経ち、東日本大震災では、津波で具体的なモノを失う経験をしました。多くの方々が、生きる動機を失いかけて明日への一步を示唆するヒントを模索されたことと思います。それらへの答えを民映研作品は内包しているのです。

民映研作品上映後の感想で、「モノクロ映画だった」「戦前の日本ですか」等思いがけない言葉がまま登場します。もちろん全作品カラー作品です。大阪万博はもう終わっています。それなのに昔の風景を見た印象が残る。そこに今は無いモノを見出しているとも言えられます。制作時には、その時でなければ記録できないモノを記録するという命題をもって作業を続けていました。その時でなければ再現できないことも多い中、再現記録作業をしています。制作時点では、「今撮らなければ」という課題を抱えて必死だったと思います。その結果、作品群には当時の思いはもちろん、当時は想定外の失われたモノが撮られているのです。

全作品に共通して浮かび上がる主題は、「こころの豊かさ」です。こころの豊かさは、飽食時代を通り過ぎ正社員が遠くなった現代日本に、最も失われた感覚ではないでしょうか。現代社会から未来へ向かって進む時に指針として見つめる豊かさを示唆する、ひと昔以上前の日本人が大切にしていた感覚。

作品は祭事、農、漁、猟、技と、それぞれ寄り添い見つめたものは違いますが、その根幹に見えるものは共通します。それは姫田さんたちの視点がぶれなかつた証^{あかし}。民俗学の学者ではなく、^{あかし}野にあるものの視点の賜物だと思っています。

民映研活動の初源一九六一年には、私は一九六〇年生まれの一歳児でしたが還暦を迎えました。時間の歩みは早いのです。まだまだ民映研の存在に意義がある時代は続きます。

二〇二一年秋

民族文化映像研究所

代表理事 小原信之

【初版の序】

野にありて耳・目をすます 挨拶にかえて

民族文化映像研究所が正式に発足したのは、一九七六年（昭和五一年）七月一日でしたが、活動の初源は、一九六一年（昭和三六年）に遡ります。つまりこの研究所には一五年間にわたる長い前史があり、その前史のなかでこの研究所の基本的な方向や性格がごく自然に生みだされ、培われています。

方向というのは、何をしようとしているのかということであり、性格というのは、どんな人間がどのようにそれを為そうとしているのかということです。

ささやかではありますが、このたびはじめてこの研究所の『作品総覧』をまとめ、広く世の人にも御覧いただくとするに当たって、まずそれらのことを記させていただきます。それらは、いわばこの研究所の初心であり、将来の指針でもあるからです。

はじめに方向についてですが、それはこの総覧の初期の作品群の名からも容易に御推察いただけるように、「私たちが生を承けた日本列島に生きる庶民の生活と生活文化を記録する」ということです。私たちはそれを、「日本の基層文化を記録する」という言い方もします。

縁あって私たちがそこを訪ね、記録作業をさせていただいた「庶民の生活と生活文化」には、共通して、自然との深いつながり、深い対応があります。そしてそれが、私たちの言う「基層文化」なのです。私たちが活動を開始した一九六〇年代初頭は、それ以後今日にいたる日本の政治、社会、経済、さらには文化の方向をも決定づけるような大転換期でした。日米安保条約の改定批准をめぐる激しい政治的闘争が、その焦点ともいえるべきものでした。そしてその後のいわゆる経済高度成長期が、今日の日本の経済的繁栄と、それとは裏腹なさまざまなひずみをもたらしたのですが、その激動の時期に私たちはひたすら「日本の庶民」とその人たちが体现している「日本の基層文化」に目を凝らし、その記録作業をつづけてきました。

日本民俗学の大先達、柳田国男が、その著『遠野物語』の序文で言っている「明神の山の木兎のごとく」のようにでした。「今の事業多き時代に生まれながら、問題の大小をもわきまへず、その力を用ゐる所当を失へりといふ人あらば如何。明神の山の木兎のごとく、あまりにその耳を尖らしあまりにその眼を丸くし過ぎたりと責むる人あらば如何。はて是非もなし」。

私たちが縁を得た「日本の庶民」は、経済成長至上、金もうけ至上の潮流に押しまぐられ、自らの体に承けついでかけがえのない「基層文化」の貴さをも捨てなとしていました。私たちが深い教えを受け続けているアイヌの人々も決してその例外ではありませんでした。

次に私たちの研究所の性格、つまりどんな人間が、どのようにそれらの作業をしてきたかということです。

端的に言って、私たちは「野にあるもの」でした。そして、自発的に、自主的に作業をしてきました。「ごく少数の志を同じくするものによる自主記録映画制作活動」、前史時代の私たちは、自分たちの活動をそう呼んでいました。が、私たちが志したのは、いわゆる映画一般ではありません。つまり映画ならコマーションでもなんでもやる、という姿勢ではありません。先に述べた「方向」を維持して行くことでした。当然のことながら、活動資金のことなど課題は山積でした。

「貧乏を苦にしないものたち」、私たちの師であり、研究所創設発起者の一人でもあった民俗学者、故宮本常一先生は、そう私たちを評しました。私たちに学問の大事さを教え、またあくまでも人と事実に学ぶことの大事さを教えてくれたのも、民族文化映像研究所の名をいっしょに考えてくださったのも宮本先生でした。

「野にあるもの」には、笠にきる権威も強制力もありません。私たちには、お互いの内に抱く自発性、志しかありませんでした。が、幸い研究所発足以後、各地の公的機関からの委嘱がふえ、国内外の研究者・研究機関との共同作業や交流も次第に活発になってきました。ありがたいことです。

一九八九年八月

民族文化映像研究所所長

姫田 忠義

民映研作品総覧

1970-2005

日本の基層文化を撮る

目次

新版刊行にあたって

小原信之 3

【初版の序】
野にありて耳・目をすます 挨拶にかえて 姫田忠義 6

1970

1 山に生きるまつり 16 / 18

1971

2 アイヌの結婚式 17 / 19

1974

3 チセアカラ——われらいえをつくる 20 / 22

1975

4 うつわ——食器の文化 21 / 23

1976

5 奥会津の木地師 24 / 26

1977

6 豊松祭事記 25 / 27

7 椿山——焼畑に生きる 28 / 30

8 イヨマンテ——熊おくり 29 / 31

1978

9 諸鈍シバヤ 32 / 34

10 沙流川アイヌ・子どもの遊び 33 / 35

11 アイヌの丸木舟 36 / 38

12 竹縄のさと 37 / 39

13 豊作の祈り 40 / 42

1979

14 甕島のトシドン 41 / 43

15 秩父の通過儀礼 その一——安産祈願から帯解きまで 44 / 46

16 御伊勢講とほうそう踊り 45 / 47

本文頁／写真頁

1980

本文頁／写真頁
◀ ▶

17 周防猿まわしの記録

48／50

18 下園の十五夜

49／51

19 竹富島の種子取祭

52／54

20 夏祭と十五夜行事

53／55

21 秩父の通過儀礼 その二——子どもザサラから水祝儀まで

56／58

1981

22 佐渡の車田植

57／59

23 越後二十村郷・牛の角突き

60／62

24 秩父の通過儀礼 その三——若衆組と竜勢

61／63

25 大隅・薩摩の春まつり

64／66

26 アマルール——大地の人バスク

65／67

1982

27 奄美の豊年祭

68／70

28 秩父の通過儀礼 その四——クレ祝儀・モライ祝儀

69／71

29 竜郷のアラセツ——シヨチヨガマ・平瀬マンカイ

72／74

30 喜界島の八月行事

73／75

31 与論の十五夜踊り

76／78

33 鹿児島島の正月行事

77／79

1983

34 秩父の通過儀礼 その五——年祝いから先祖供養まで

80／82

35 金沢の羽山ごもり

81／83

36 伊作の太鼓踊り

84／86

37 八朔踊りとメンドン

85／87

38 佐仁の八月踊り

88／90

39 ボゼの出る盆行事

89／91

1984

40 標津・堅穴住居をつくる

92／94

41 沙流川アイヌ・子どもの遊び——冬から春へ

93／95

42 ホゼと願成就

96／98

43 大隅の柴まつり

97／99

44 川口の鋳物師

100／102

45 奥三面の熊オソ

101／103

46 山人の丸木舟

104／106

47 奥三面の「ドオ」つくり

105／107

本文頁／写真頁
◀ ▶

48	ぜんまい小屋のくらし	108	／	110
49	田島祇園祭のおとうや行事	109	／	111
50	越後奥三面 山に生かされた日々	112	／	114
1985				
51	祓川の棒踊り	113	／	115
52	羽島崎神社の春まつり	116	／	118
53	高山の水神まつりと八月踊り	117	／	119
54	西米良の焼畑	120	／	122
55	川越の職人——鳶と左官	121	／	123
56	わたしたちのまち・自然・いのち	124	／	126
1986				
57	陸奥室根の荒まつり	125	／	127
58	奈良田の焼畑	128	／	130
59	武州藍	129	／	131
1987				
60	奄美のノロのまつり	132	／	134

61	奄美のノロのまつり その二	133	／	135
62	マイワイの社会	136	／	138
63	からむしと麻	137	／	139
64	まちゃん(待網漁)——与論島	140	／	142
65	カタロニアの復活祭	141	／	143
1989				
66	竹に暮らす	144	／	146
67	埼玉の瓦職人	145	／	147
68	奄美の泥染	148	／	150
69	茂庭の炭焼き	149	／	151
70	奥茂庭——摺上川の流れとともに	152	／	154
71	忍城の鯪	153	／	155
72	吐噶喇——七つの島々	156	／	158
1990				
73	舟大工の世界	157	／	159
74	川越まつり	160	／	162

75	山北のボタモチ祭	161	163
76	薩摩の紙漉き	164	166
77	埼玉の木地師	165	167
78	越前和紙	168	170
79	青海の竹のからかい	169	171
80	隣閣——千少庵の茶室	172	174
81	旧岩澤家住宅の復原	173	175
82	薩摩の水からくり	176	178
1991			
83	湯——山形県大蔵村肘折温泉郷	177	179
84	埼玉の押絵羽子板	180	182
85	茂庭のしなだ織	181	183
86	イザイホー——一九九〇年——久高島の女たち	184	186
87	旧原家住宅の復原	185	187
1992			
88	根知山寺の延年	188	190
89	茂庭の焼畑	189	191

本文頁／写真頁
◀ ▶

90	小川和紙	192	194
1993			
91	神と紙——その郷のまつり	193	195
92	茂庭のくらし——狩猟・漁労・採集	196	198
1994			
93	埼玉の箕づくり	197	199
94	那珂川の漁労	200	202
95	寝屋子——海から生まれた家族	201	203
96	平方のどろいんきよ	204	206
1995			
97	越後奥三面 第二部——ふるさととは消えたか	205	207
98	日光山地の鹿狩り	208	210
1996			
99	コガヤとともに——世界遺産登録記念	209	211
100	シシリムカのほとり——アイヌ文化伝承の記録	212	214
1997			
101	たまはがね——子どもがひらいた古代製鉄の道	213	215

本文頁／写真頁
◀ ▶

102	太平洋の中の新島	火山島・新島の成り立ち	216	218
103	新島の植物		217	219
104	集落の成り立ち		220	222
105	漁の世界	海と新島①	221	223
106	舟づくり	海と新島②	224	226
107	くさやづくり	海と新島③	225	227
108	新島の年中行事	正月行事	228	230
109	新島の年中行事	盆行事	229	231
110	新島の真田織り		232	234
111	稲ワラの恵み	飛騨国白川郷	233	235
1998				
112	川の大じめ	埼玉県上尾市川	236	238
113	七島正月とヒチゲ	鹿児島県十島村恵石島	237	239
114	草・つる・木の恵み	飛騨国白川郷	240	242
2000				
115/116	越前笏谷石	石と人の旅	241	243
117	飛騨白川郷のどぶろく祭		244	246

2001				
118	竹の焼畑	十島村恵石島のアワヤマ	245	247
2005				
119	粥川風土記		248	249
	撮影地一覧			250
	フィルム作品以外の民映研作品及び刊行物			258
	野にあるものとして 民映研と私			263
	父・姫田忠義が記録し続けたもの 姫田 蘭			264
	対馬の旅、そして忘れ得ぬ人々 伊藤領男			269
	『民映研作品総覧』の向こう側 澤幡正範			278
	【本書制作を終えて】			
	民映研をめぐる人々 宮川典子			288
	執筆者プロフィール			300

「本書を読むにあたって」

* 作品タイトルの上など、本書内すべての黒丸白抜き数字〈例「**①**」〉は作品番号を表わす。**㊥**は欠番となっている

* 作品タイトル下の地名は撮影地、また〈例「**1970 年**」〉は制作年(度)を表わす

* グレーの丸「**●**」以下は作品の上映時間、自主制作または委嘱制作の別、受けた推薦や賞などである

* 本文等で記載している地名は、全て撮影時の市町村(字)名である

* まつりや行事の日付は、旧暦で行うものについては「旧暦何日」とし、新暦は省いた

* 年齢を明記する際、数え年の時は「数え年何才」とした

* 物や事柄の名称はなるべくその土地での呼び方で記載したが、紙面の都合から(説明しきれないものについては)一般名称を使っている場合がある

民映研作品総覧

1970-2005

——日本の基層文化を撮る

① 山に生きるまつり

宮崎県西都市銀鏡

1970年

宮崎県の山村、銀鏡しろがみの銀鏡神社では、厳肅に霜月（旧曆十一月）のまつりが行われる。そこで行われる三三番の神楽は古風な山の文化を伝えており、一九七七年には国の重要無形民俗文化財に指定されている。

銀鏡のある米良山めら山地帯は、焼畑・狩猟を生活の基本としてきた。近年は一月二日から一六日にかけて行われているこの霜月のまつりにも、狩猟文化が色濃く反映している。まつりに先立って狩ったイノシシの首を神楽の場に安置し、その前で夜を徹して神楽を行うのである。

一二月一四日の朝、神社境内に設けられた神楽の場（神屋こうや）に「おしめ」が立てられる。おしめは神の依り代である。その下には、荒御霊あらみたまであるイノシシ、和御霊にぎみたまである米、餅などが安置される。そして、各集落からお面様（神面しんめん）を捧げた行列が集まる。お面様がそろわないと、まつりは始まらない。

夜に入ると神楽が始まり、翌日午前一〇時頃まで行われる。舞うのは祝人いはり。草分けの家を中心にした旧家

の人々で、世襲である。村の男女が歌を掛け合う神楽囃子は、古代の歌垣を思わせる。

神楽は三つの大きい構成要素をもっている。一つは神々の降臨を願う神楽。面をつけないで舞われる。二つ目は真夜中から夜明けにかけて行われる、神々の降臨の神楽。神面をつけた神楽である。

三つ目は、夜明け以降に行われるもの。ずり面とよばれるリアルな面をつけ、ユーモラスな所作で生命の誕生や作物の豊穰をあらわす。なかでも三〇番目のシトギリの神楽は、古風な狩人の装束をつけた二神が、シシ狩りの所作をする。「とぎる」とは足跡を追うという意味である。

このまつり最後の日、一六日朝、銀鏡川の岩場を祭場としてシシバまつりが行われる。イノシシの左耳の肉片七切れを串にさした七切れ肴を神に供え、その年に獲れた獣の霊を慰めるとともに、これから始まる狩りの豊饒を願うのである。

2 アイヌの結婚式

北海道沙流郡平取町二風谷／
勇払郡鵲川町

1971年

一九七一年四月一〇日、北海道二風谷^{にふた}で、アイヌ流の結婚式が行われた。新婦小山妙子さん、新郎貝沢三千治さん、ともにアイヌの血を受けた人である。

明治時代以降、内地日本人の進出と圧迫によりアイヌの生活文化は変容を迫られ、それは結婚式にも及んでいた。過去七、八〇年、アイヌ流の式は行われていないという。

そのアイヌ流結婚式の実現の契機となったのは妙子さんの決意であり、それを支えたのが萱野茂さんをはじめとする二風谷に住むアイヌの人たちであった。

ウウエペケレ、ユーカラなどの伝承、古老たちの見聞をもとに行われた結婚式。そして、その復活に参加したアイヌの人たちの想い。これは、アイヌ（アイヌ語で「人間」の意味）民族精神復興運動の先駆的あらわれの記録である。

そして、これに続く民族文化映像研究所制作のアイヌの生活文化の記録七作品の第一作目となったものである。

結婚式を前にして贈り物が交換される。

女は刺繍をした手甲を、男は彫刻をほどこしたマキリ（小刀）を渡す。そして男の家から女の家へのイコロ（宝物）渡し。男の住む村では、新婚夫婦の家作り、御馳走の準備がされる。

そして出発の時、母親は、娘の腰にラウンクツを巻く素肌^{ヌミ}に直接巻かれる。その結び方は母から娘へと伝えられてきた、アイヌ社会に底流する母系制のしるしである。花ゴザに包んだわずかな荷物を背負って花嫁は花婿の村へ向かう。

結婚式の儀式。エカシ（長老）が、火の神への祈りをする。花婿と花嫁はトゥキ（高盃）に盛られた御飯を分け合って食べる。

続いて、宴が始まる。鮭汁とシト（団子）がふるまわれ、ウポボ（すわり唄）、ハララキ（鶴の舞）、ホリッパ（群舞）などアイヌの唄と踊りが夜更けまで賑やかに続く。その間に新郎新婦の床入りの儀礼が行われる。

● 33分 ● 自主制作 ● 文部省選定

● 1971年度東京都教育映画コンクール奨励賞 ● イタリア・ボポリ映画祭入賞



1



3



2



5



4

1. 七人の鬼神が新しい命を促す
2. まつりの朝、「おしめ」が立てられる
3. イノシシの頭を祭壇に供えて
4. 神々を勧請する祝人(ほうり)
5. シシトギリ。イノシシの足跡を追う



1



3



2



4

1. 山盛りの御飯を食べ合う式の中心儀式
2. 花婿の待つ村に到着、出迎える村人
3. ラウungkツの着け方を習う
4. 花婿が半分食べた後に花嫁が箸をつける

チセアカラ

——われらいえをつくる

北海道苫小牧市

1974 年

一九七二年の春、萱野茂さんら二風谷の人々によって行われた、アイヌの伝統的な家作りの記録である。

家作りには二つの工法があった。一つは、地面に穴を掘り、柱を立て、その上に梁、桁、屋根と組み上げていく工法。もう一つは、屋根をまず地上で組み立て、それを人力で持ち上げて柱をかますチセブニ（家起こし）という工法。どちらも屋根の構造の基本をなしているのは、三本の材を結束した三脚状のケトゥンニである。ケトゥンニによる工法を、寄棟造りの原型とみる人もある。

アイヌの家作りは、祈りに始まり祈りに終わる。はじめに敷地にボン（小さな）・ケトゥンニを立て、火をたき、イナウ（木を削って作る祭具）を立て、祈る。そこにいた虫や獣たちの霊を慰めるとともに、この土地を一時貸してくださいという意味をもつ火の神への祈りである。

家が完成するとチセノミ（家への祈り）。そこでは、屋根裏にヨモギで作った矢を射るチセチヨツチャが行

われ、材料となった木や草の悪霊を鎮める儀式をする。あるいはチセコロカムイ（家の守護神）を作り東側の柱の後ろに安置する。囲炉裏の消し炭を火の神からいただく、サンペヘ（心臓）としてつけたイナウである。

アイヌの家作りには、アイヌの知恵や自然観をうかがうことができる。そして、それらと密接にかかわったアイヌ語の表現のおもしろさ。ケトゥンニはそのよい例で、「（自然あるいは神から）私・借りた・木」という意味だという。また、一対のケトゥンニをつなぐ構造材、チセマカニ。「家・開く・木」という意味で、屋根の横ゆれやひずみを防ぐ。

他に、屋根の茅をしつかりとおさえるレウエサクマ（曲げる柴）、あるいは棟の雨漏りを防ぐための針を使わない葺き方、ヤイコケメイキ（自ら針を使う）、壁になる茅がすかないようにとめるイトウリテセ（のばして編む）の方法など、次々と現れる。

● 57 分 ● 自主制作 ● 1974 年度教育映画祭優秀賞

● 1974 年東京都教育映画コンクール銀賞 ● 1974 年度キネマ旬報文化映画ベスト・テン第 5 位

わたしたちの身のまわりには、長い歴史の流れを受け継ぎながら、今に生きている生活文化がある。日本のなうつわ（食器）もそうである。その源流と展開を日本全域に訪ねた。

縄文時代の遺跡からは、大型の土器とともに、今日の碗や皿の源流というべき小型の土器が出土している。続いて展開する弥生土器、須恵器などの土の系統。

並行して、木の系統を訪ねる。与那国島ではクバの葉を鍋に、アイヌは樺の皮を器にする。縄文時代にすでに現れている木器と漆。そして木の器を飛躍的に進歩させた技術の系譜を受け継ぐ人々との出会い。奈良時代に登場したといわれる手引きロクロを伝える木地師。漆かき。輪島の塗師など。

土と木の器は独自に歩みつつ、互いに深くかかわり合い、今日へ展開してきた。それらを巧みに組み合わせ、日本人は多彩な食器の文化を育んだ。瀬戸内海の塩田経営者の家にある食器群、土佐の皿鉢料理、会津若松の食器市などを訪ね、それらを生みだしてきた

日本列島の豊かな草木、水、土、そして日本人の生活技術に思いをはせる。

【登場することから】◎北海道沙流郡平取町二風谷◎樺の皮の器／

◎青森県亀ヶ岡遺跡◎炭化物の付着した縄文土器、北津軽郡金木町◎曲げワッパ、上北郡上北町◎木皿で飯を食う◎岩手県気仙郡住田町◎竹籠、二戸郡一戸町◎漆かき◎福島県南会津郡田島町針生◎木地師、会津若松市◎食器市◎千葉県加曽利貝塚◎縄文土器を作る◎長野県尖石遺跡◎縄文土器◎石川県輪島市◎漆塗り◎岐阜県多治見市◎江戸時代の山茶碗・新羅神社◎静岡県湖西市◎須恵器・窯跡◎愛知県瀬戸市◎室町期の窯跡◎三重県伊勢神宮◎須恵器◎兵庫県篠山市今田町立杭◎登窯◎奈良県平城宮跡◎鉄器・ワッパ・桶・須恵器、東大寺◎お水取りでの僧の食事◎広島県尾道市・生口島堀内家◎食器群◎高知県吾川郡池川町椿山◎焼畑、池川町◎皿鉢料理◎佐賀県唐津市◎叩きの土器・野焼き・陶土採掘場、波戸岬◎明時代の磁器の破片、有田町◎磁器・磁器原石採掘場◎宮崎県西都市銀鏡◎アワとヒエ◎沖縄県与那国島◎クバの葉の鍋



1



2



4



3

1. 屋根材を組んだ後、棟木を載せる
2. 屋根組の基準になるケトゥンニ(三脚)
3. チセブニ(家起こし)。地上で組んだ屋根を一気に持ち上げる
4. 火の神にチセの完成を報告(カムイノミ)



1



2



3



4

1. クバの葉の鍋。直接火にかけて湯を沸かす
2. ロクロの上で糸底の整形
3. 野焼き。窯以前の焼成法
4. アイヌの器。樺の皮を畳んで作る

5 奥会津の木地師

福島県南会津郡田島町針生

1976年

日本列島には、近年まで移動性の生活をする人々が活躍していた。山から山へ移動して椀などの木地物を作る木地師も、そのなかにあった。

これは、昭和初期まで福島県南部の山間地で盛んに移動性の活動をしていた木地師の家族、小椋藤八さん、星平四郎さん、星千代世さん、湯田文子さんによる、当時の生活と技術の再現記録である。作品④「うつわ―食器の文化」の制作過程での藤八さんたちとの出会いから生まれた。

この地域はブナを中心にした落葉広葉樹林帯である。藤八さんたちは、ブナを材料とした椀を作っていた。

まず木地屋敷を作る。屋根も壁も笹で葺く、掘立て造りである。家の中には、囲炉裏のある座敷とフイゴやロクロ台などを置く広い土間がある。屋敷ができあがると山の神を祀り、フイゴまつりをする。

山の神まつりで藤八さんが唱えた唱え言は、古代のタマフリではないかとみる人もある。谷から水も引いてきた。

椀作りが始まる。男たちは、山へ入りブナを倒し、伐り株に笹を立てて神に祈る。そして、その場で椀の荒型を作る。

倒したブナに切り込みを入れて山型を作り、マガリヨキでそれをはつり起こしていく。女たちが荒型を木地屋敷に運び、椀の外側を削って整形するカタブチ作業、中を削るナカグリ作業と続ける。男たちが、手引きロクロで椀に仕上げていく。

できあがった椀は馬の背で町へ運ばれていく。

人の力で回される手引きロクロは、奈良時代に大陸から導入されたものだという。

藤八さんたちは移動性生活をやめ、手引きロクロの作業もしなくなつてすでに五〇年余りたつていた。しかし藤八さんたちの身体には、千年を越す技術の伝統が見事に息づいていたのであった。

● 55分 ● 自主制作 ● 文部省特選

● 日本映画ペンクラブ推薦 ● 1976年度キネマ旬報文化映画ベスト・テン第3位

6 豊松祭事記

広島県神石郡豊松村

1977年

広島県の東部、岡山県との県境の山地にある豊松村。とよまつそんこの村は標高四〇〇〜五〇〇メートルのうねうねとした準平原にある。そのうねりのひとつひとつに「名」とよばれる集落がある。数軒から十数軒の集落であり、家の前には水田と畑、背後に山林をもち墓地をもつ。

名とは、古代から中世にかけて日本に発達した社会組織だが、豊松村では、現在でも社会生活やまつりにそれが生きている。

これは、中世的な古風さを偲ばせる豊松村での一年間のまつりを、農耕生活と対比させながら記録したもので、作業は七年間に及んだ。

ここでは、一年間におびただしい数のまつりが行われる。火や水、大地、樹木、動物に対しての祈り。また、人や家の繁栄を願うまつり、祖先のまつり。あるいは作物、特に稲の豊作を願う行事などである。

作物の豊作を願う行事は、正月二日畑に鋤を打つ「小鋤初め」と十一日田を打つ「大鋤初め」に始まる。そして田植え時期、水口の田に栗やウツギの枝を立ててモリ

キを作り、サンバイ様を迎える。サンバイ様は田の神であるが、豊松では盆前に「サンバイあげ」をして山へ帰っていただく。

豊松のまつりをみていくとそれが季節、あるいは生産行為に対応しているだけではなく、この村の社会組織の展開と対応していることにきづく。

正月から春にかけては家のまつりが中心であり、春から秋にかけては名のまつりが現れ、総鎮守鶴岡八幡宮の秋の大祭では名が集まった八つの郷の集合体のまつりになる、というふうにある。

まつりと社会組織の関係をこれほど構造的に教えてくれるところは少ない。

祖先がワサダ名という名の名主であり、農業を営む内樋恭昌さんは言う。「コンニャクは土の中に住むものですから……」。農業とは土の中に住むものを育てることであり、それを基礎に日本人の生活と文化の基層が培われてきたことを、豊松は改めて教えてくれる。



1



3



2



4



5



6

1. 椀の原型(荒型)を掘り出す
2. プナの木伐採、星平四郎さん
3. 椀の荒型
4. 椀の外側を削る湯田文子さん(手前)
5. 手引きロクロで椀を成形する小椋藤八さん
6. カンナ棒で椀の内側を削る



1



2



3



4



5

1. 遷宮祭。御羽車に乗った神が遷座
2. 土公祭。竈の神を祀る
3. 大田植の早乙女
4. 稲刈り前の穂かけ行事。サンバイ様に感謝
5. 鶴岡八幡宮の秋の例大祭に詣でる人々

7 椿山——焼畑に生きる

高知県吾川郡池川町椿山

1977年

椿山^{つばやま}は、四国の最高峰石槌山の南方、急峻な溪谷奥の斜面にある戸数三〇戸ほどの小集落である。平家落人伝説も伝わる。その椿山は、雑穀主体の焼畑作業を営々と続けてきた。これは、椿山の焼畑を中心にした一年の生活と人々の生きざまを、四年間にわたって記録した長編である。

焼畑は第二次世界大戦後まで全国各地で行われていたが、一九五〇年代に入って急速に消えていった。しかし、椿山の人々は焼畑を続けてきた。その椿山の生活の大きな支えとなってきたのがミツマタ栽培である。春、焼畑地全域にミツマタの花が咲く頃、その刈り取りと皮剥ぎ作業が行われる。ミツマタは和紙、ことに紙幣の原料である。

この焼畑には、前年の夏に木を伐^はつて春に焼く^{なつやま}「春山」と、夏に木を伐^はつてすぐ焼く^{なつやま}「夏山」とがある。三年から五年作物を作^なつて山に返し、二〇〜三〇年の周期でもとの場所に帰る。作物はヒエ、アワ、大豆、小豆、トウモロコシ、ソバ、タイモ（サトイモ）など

で、土地の高さや陽当たりなどの条件によってその作付け順序が決まる。

夏。突如、強烈な雨台風が椿山を襲った。周囲の山や谷、そして集落の足下も崩れ、その打撃のために生活のリズムが翌年夏まで完全に狂ってしまった。

再び焼畑作業が始まり、作物の豊饒を願う虫送りの行事や、中世の踊念仏を髻髻^{ほうふつ}させる太鼓踊りのある氏仏^{うぶ}のまつり、先祖まつりなども復活する。椿山には、十一の先祖組があり、それは、焼畑を軸にしたこの社会生活の基礎単位である。

また、隣村からはるかに遠い地にある椿山には、昨今の日本人がややもすれば忘れがちなものが多い。例えば、明日への備え。各家の倉には山と積まれたヒエの俵がある。ヒエを必要とする時代は過ぎ去ったのに、である。

収穫の秋、タイモを掘り、アワやソバを刈り、豆を引く。そして味噌や豆腐を作る。

満山の紅葉ののち、椿山に雪の季節が来る。

● 95分 ● 自主制作

● 1977年度キネマ旬報文化映画ベスト・テン第2位

8 イヨマンテ——熊おくり

北海道沙流郡平取町二風谷

1977年

イヨマンテとはイ（それを）・オマンテ（返す）という意味で、熊の魂を神の国へ送り返すまつりをいう。アイヌ民族にとって、熊は重要な狩猟対象であるとともに神であり、親しみと畏敬の対象であった。熊は神の国から、毛皮の着物を着、肉の食べ物を背負い、胆という万病の薬を持って、アイヌつまり人間の世界へ来てくれる。そのお札に人間界のお土産を持たせ、また来てくださいと送り返すのだとアイヌは言う。

一九七七年三月上旬、このイヨマンテは行われた。指導にあたったのは二風谷アイヌ民俗資料館の萱野茂さん。「本物のイヨマンテを覚えておきたい」というアイヌの青年たちの熱意に支えられて、まつりは実現した。準備。山から材料の木や草を集めて、祭祀道具を作る。酒やまつりの食べ物を作る。

イヨマンテが始まる。熊は檻から出され、ヌササン（祭壇）の前に連れていかれる。花矢が次々に射られ、最後に矢が射られる。その前でニヌムツチャリ（クルミと干魚を撒く）をする。アイヌの村は豊かで楽しい所だと神

の国に言づけてもらいたいという願いが込められている。またアイヌペウレフ（人が熊の役をして遊ぶ）や綱引きをして、豊猟を祈る。

ヌササンの前で熊の解体。肉は作法に従いカムシケニ（肉を背負う木）にかけられる。次いで、魂が宿っているとされるオルシクルマラプト（毛皮をつけた頭）をチセ（家に招き入れ、火の神との対面をする。そして夜を徹しての宴

二日目深夜、ウンメンケ（頭の化粧）。鼻先と耳の毛だけを残して熊の頭から毛皮が取られ、目、舌、脳も取り除かれる。そしてイナウキケ（木の削りかけを使った祭具）や麴（うい）で美しく飾る。その頭骨をユクサパウンニ（熊の頭をのせる木）にのせ、カムイシンタ（神の乗り物）をつけ、性器をつるし、祭主のしるしをつけたパスイ（へら）をつるし、着物を着せ、土産を持たせる。そして三日目早朝、ケオマンテ（なきながら送り）の儀式が行われる。

イヨマンテは、アイヌの自然観、生命観が凝縮したまつりである。生命体である人間と他の生命体である動物との対峙。そこには人間の信仰、文化の原初への啓示がある。

● 103分 ● 自主制作 ● 日本映画ベンクラブ推薦

● 1989年第3回イタリア・フェルモ国際北極圏映画祭「人類の遺産」賞

● 1991年第5回エストニア・ペルノー国際映像人類学祭最高科学ドキュメンタリー賞



1



3



2



4



5

1. 椿山集落の全景
2. 焼畑(春山)の火入れ
3. 縦に2列に火を着けてゆく
4. 小豆やアワの種まき
5. 収穫され、棒杭に掛けられたアワの束



1



4



2



5



3



6

1. 熊に仕留めの矢を構える
2. 客人を迎えて儀式初めの祈り
3. 熊を檻から出す。周りで皆が唄い踊る
4. 檻から出た熊
5. 火の神への儀式
6. 祭壇の中心に供えられた熊の頭

9 諸鈍シバヤ

鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍

1978 年

奄美大島の南に接して浮かぶ加計呂麻島の東南端部、

諸鈍は、帆船時代、日本本土と琉球をつなぐ舟の重要な寄港地であった。ここには、諸鈍シバヤとよばれる芸能が伝えられている。シバヤは、村をあげての祝い事や行事のたびに演じられてきた。一九七六年には、国の重要無形民俗文化財に指定されている。中世の日本本土や琉球、あるいは、遠く朝鮮半島や中国とのつながりをうかがわせる歌謡や演技、衣装、そしてそれらを包み込む諸鈍独自の文化的色彩の貴重さが認められてであった。一九七八年当時十一の演目が伝えられており、これはその全記録である。シバヤは、シバヤ人衆とよばれる男たちによって演じられてきた。

準備。粘土の型に、何枚も紙を貼り重ねてカビデイル（紙面）を作り、シュロ蓑や笠を作る。巨大な蛇や人形、チヂン（太鼓）の補修をしていく。カビデイルや人形の化粧に使う紅は、ハイビスカスの花とカタバミの葉をもんで作る。会場には椎などの木や柴でシバヤ（楽屋）が設えられる。このシバヤには、シバヤ人

衆以外は誰も入ることができない。

シバヤ当日の朝、シバヤ人衆は浜へ出てシュンハナティカル、みそぎをする。そして演目が始まる。

【演目】①イツソウⅡ楽屋入り ②サンバトⅡ三番叟 ③ククワ節

Ⅱ平家の残党が平敦盛の墓を訪ねて須磨の浦をさまよう様子を表す踊り ④シンジョウ節Ⅱ種子島の名高い法師シンジョウが踊ったという踊り ⑤キンコウ節Ⅱ吉田兼好を歌った唄と踊り ⑥シ

シキリⅡ浮かれている美女をシシが襲おうとすると、狩人が来てシシを退治する ⑦タットドンⅡ座頭殿がすりかえられた琵琶を

探し歩く ⑧スクテングワⅡ宋による中国の天下統一を祝って踊ったという棒踊り ⑨タマティユ（玉露）Ⅱ中国の美女玉露姫は

親不孝で、酒を飲んで踊り狂っていた。その天罰がくだって大蛇にのまれるという人形芝居 ⑩鎌踊りⅡ豊年を祝う踊り ⑪タ

カキ山Ⅱ仁徳天皇の遺徳を偲ぶという歌謡と太鼓踊り

沙流川アイヌ・ 子どもの遊び

北海道沙流郡平取町二風谷

1978年

アイヌ民族が伝えてきた子どもの遊びには、生活に必要な技術や自然観が息づいている。しかし、昨今ではアイヌの子どもたちはアイヌの遊びを知らない。萱野茂さんはそのことを憂え、自分が子どものころ覚えた遊びを子どもたちに伝えていった。

墓地に行く子どもたち。杖をついて腰を曲げ、老人のまねをする。こうすれば魔物から身を守ることができると教えられたという。夜の水汲み。水の神様の目を覚ますおまじないの言葉を唱えながら、水を汲む。水の神も夜は眠っている。

囲炉裏に集い、セイピラッカ（貝の下駄）を作る。火を上手に使いホッキ貝に穴をあけ、縄を通す。セイピラッカをはいて競争する。

家の外に出て遊ぶ。杭を倒し合うカックイ。草の葉を鬼の牙に見立てたり、歯で噛んで模様をつけたり。ミズキの茎で鎖作りもする。ブドウヅルの輪を二股の木で作ったカリプペカプ（蔓の輪を受けるもの）で受けて遊ぶ。トイタシヨシヨシ（畑を耕せ）とよぶ遊

び、ドンガイやヨブスマソウの笛作りなどが続く。

野山や川を舞台に遊びが展開する。水鉄砲、笹舟作り。ペラアイ（矢）を作って魚を捕る。そして山へ入って、フキの葉やクサソテツで小屋を作る。夜、チュッポスナンカラ（マカバの皮を燃やして明かりとし魚を捕る）。魚を焼き、御飯を神に供え、小屋で寝る。

萱野さんは遊びのなかで、子どもたちに草木や遊びの名前をアイヌ語で教えていった。アイヌ語そのものと、それがあらわすアイヌの生活感や自然観を伝えるためである。

子どもたちは萱野さんに誘われて山や川を歩きながら、微妙な自然とのつきあい方を感じとり、遊びの道具作りなどを通じてアイヌの伝統的な生活技術を学びとっていった。

この環境も、集落の目の前にある沙流川のダム建設により、急速に変化しつつある。

● 51分 ● アイヌ無形文化伝承保存会委嘱

● 1979年度第35回東京都教育映画コンクール銀賞 ● 日本映画ペンクラブ推薦



1



2



3



4

1. 演目の始まり。「サンバト」(三番叟)が口上を述べる
2. 紙で作った面、カビディラ
3. 琉球文化を感じるスクテングワの棒踊り
4. 演目「シシギリ」



1



3



2



5



4

1. 萱野茂さんと子どもたち
2. スカンボの笛をつくる
3. セイピラツカ。ホッキ貝に穴をあけて
4. カックイ。杭倒し遊び
5. 笹舟遊び
6. アペフチカムイ(火のおばあさんの神)。火の扱いを覚える



6

撮影地一覧

〔全国二六ヶ所〕

- ④ うつわ——食器の文化

〔北海道〕

- ② アイヌの結婚式 沙流郡平取町二風谷／勇払郡鶴川町
 ③ チセアカラ——われらいえをつくる 苫小牧市
 ⑧ イヨマンテ——熊おくり 沙流郡平取町二風谷
 ⑩ 沙流川アイヌ・子どもの遊び 沙流郡平取町二風谷
 ⑪ アイヌの丸木舟 沙流郡平取町二風谷
 ④④ 標津・竪穴住居をつくる 標津郡標津町伊奈仁
 ④④ 沙流川アイヌ・子どもの遊び——冬から春へ 沙流郡平取町二風谷
 ④④ シシムカのほとり——アイヌ文化伝承の記録 沙流郡平取町二風谷

日高町／沙流川流域

- ④④ 越前笏谷石——石と人の旅 檜山郡江差町／松前郡松前町／函館市

〔青森県〕

- ⑤⑥ わたしたちのまち・自然・いのち 上北郡天間林村

- ④④ 越前笏谷石——石と人の旅 下北郡大畑町／むつ市／西津軽郡深浦町

〔岩手県〕

- ⑤⑦ 陸奥室根の荒まつり 東磐井郡室根村

〔宮城県〕

- ⑤⑥ わたしたちのまち・自然・いのち 気仙沼市

- ⑤⑦ 陸奥室根の荒まつり 本吉郡唐桑町舞根

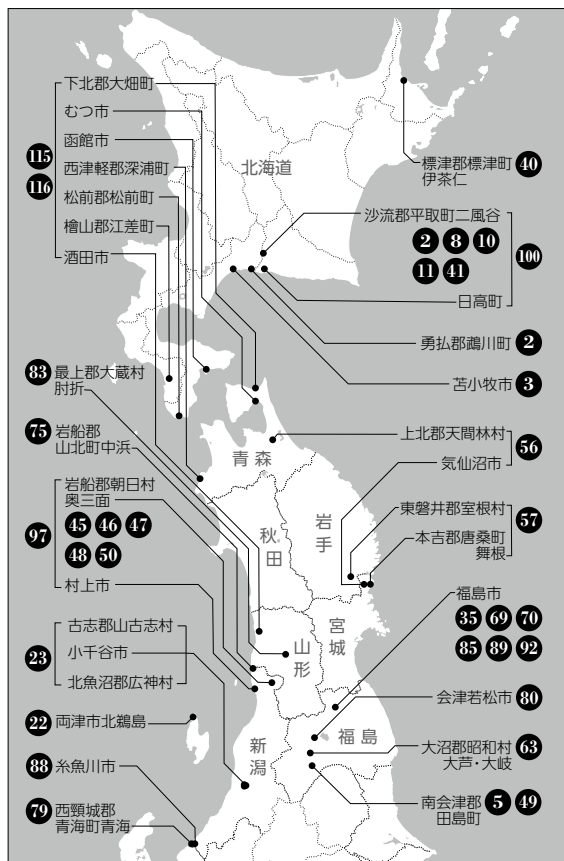
〔山形県〕

- ⑧③ 湯——山形県大蔵村肘折温泉郷 最上郡大蔵村肘折

- ④④ 越前笏谷石——石と人の旅 酒田市

〔福島県〕

- ⑤ 奥会津の木地師 南会津郡田島町針生



35 金沢の羽山ごもり 福島市金沢

49 田島祇園祭のおとうや行事 南会津郡田島町

63 からむしと麻 大沼郡昭和村大戸・大岐

69 茂庭の炭焼き 福島市飯坂町茂庭梨平

70 奥茂庭——摺上川の流れとともに 福島市飯坂町茂庭(別名号)

80 麟閣——千少庵の茶室 会津若松市

85 茂庭のしなだ織 福島市飯坂町茂庭

89 茂庭の焼畑 福島市飯坂町茂庭(別名号)

92 茂庭のくらし——狩猟・漁労・採集 福島市飯坂町茂庭

【新潟県】

22 佐渡の車田植 両津市北鶴島

23 越後二十村郷・牛の角突き 古志郡山古志村／小千谷市／北魚沼郡広神村

45 奥三面の熊オソ 岩船郡朝日村奥三面

46 山人の丸木舟 岩船郡朝日村奥三面

47 奥三面の「ドオ」づくり 岩船郡朝日村奥三面

48 ぜんまい小屋のくらし 岩船郡朝日村奥三面

50 越後奥三面——山に生かされた日々 岩船郡朝日村奥三面

75 山北のボタモチ祭 岩船郡山北町中浜

79 青海の竹のからかい 西頸城郡青海町青海

88 根知山寺の延年 糸魚川市山寺・和泉大神堂別所

97 越後奥三面第部——ふるさとを消えたか 岩船郡朝日村奥三面／村上市

〔栃木県〕

94 那珂川の漁労 那須郡馬頭町、烏山町／芳賀郡茂木町

98 日光山地の鹿狩り 塩谷郡栗山村川俣

〔茨城県〕

90 小川和紙 久慈郡大子町／水戸市

〔千葉県〕

62 マイワイの社会 長生郡二宮町／山武郡九十九里町／銚子市／匝瑳郡野

栄町／旭市／勝浦市

66 竹に暮らす 君津市泉／富津市竹岡／勝浦市

73 舟大工の世界 佐原市与田浦／安房郡和田町和田

〔埼玉県〕

12 竹縄のさと 秩父郡東秩父村御堂萩平

15 秩父の通過儀礼その一——安産祈願から帯解きまで 秩父郡長瀬町

井戸、皆野町三沢 藤原・立沢、吉田町下吉田

21 秩父の通過儀礼その二——子どもザサラから水祝儀まで 秩父郡皆野町

三沢 半平・門平、小鹿野町河原沢、吉田町塚越

24 秩父の通過儀礼その三——若衆組と竜勢 秩父郡皆野町立沢、吉田町

下吉田

28 秩父の通過儀礼その四——クレ祝儀モライ祝儀 秩父郡皆野町三沢／

秩父市

34 秩父の通過儀礼その五——年祝いから先祖供養まで 秩父市／秩父郡

吉田町小川下吉田、皆野町立沢 門平、長瀬町野上

44 川口の鋳物師 川口市

55 川越の職人——鳶と左官 川越市

59 武州藍 羽生市／熊谷市

67 埼玉の瓦職人 児玉郡児玉町／比企郡小川町飯田／川越市／行田市本丸

71 忍城の鯢 行田市本丸／比企郡小川町飯田

74 川越まつり 川越市

77 埼玉の木地師 秩父市／秩父郡両神村、大滝村、小鹿野町

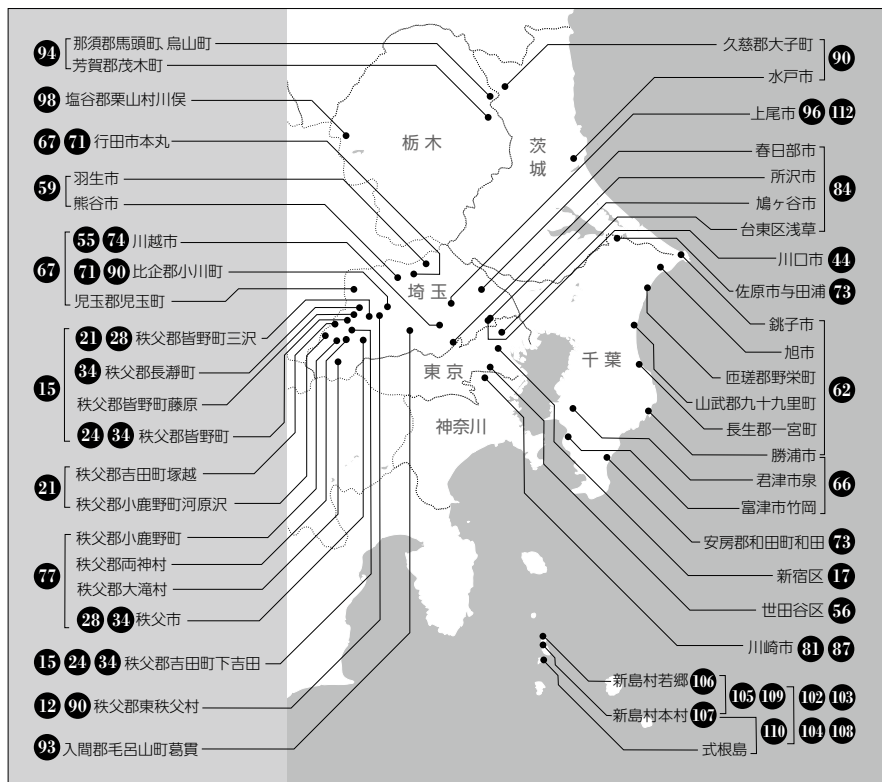
84 埼玉の押絵羽子板 所沢市／春日部市／鳩ヶ谷市

90 小川和紙 秩父郡東秩父村／比企郡小川町

93 埼玉の箕づくり 入間郡毛呂山町葛貫

96 平方のどろいんぎょ 上尾市平方

112 川の大じめ——埼玉県上尾市川 上尾市川



〔東京都〕

17 周防猿まわしの記録 新宿区

56 わたしたちのまち・自然・いのち 世田谷区

84 埼玉の押絵羽子板 台東区浅草

102 太平洋の中の新島——火山島・新島の成り立ち 新島村

本村若郷・式根島

103 新島の植物 新島村本村若郷・式根島

104 集落の成り立ち 新島村本村若郷・式根島

105 漁の世界——海と新島① 新島村本村若郷

106 舟づくり——海と新島② 新島村若郷

107 くさやづくり——海と新島③ 新島村本村

108 新島の年中行事——正月行事 新島村本村若郷・式根島

109 新島の年中行事——盆行事 新島村本村若郷

110 新島の真田織り 新島村本村・式根島

〔神奈川県〕

81 旧岩澤家住宅の復原 川崎市

87 旧原家住宅の復原 川崎市

【山梨県】

- 58 奈良田の焼畑 南巨摩郡早川町奈良田

【岐阜県】

- 99 コガヤとともに——世界遺産登録記念 大野郡白川村荻町

- 111 稲ワラの恵み——飛騨国白川郷 大野郡白川村荻町・馬狩

- 114 草・つる・木の恵み——飛騨国白川郷 大野郡白川村荻町・馬狩・小白川・戸ヶ野

- 117 飛騨白川郷のどぶろく祭 大野郡白川村平瀬・木谷・荻町・鳩谷・飯島

- 119 粥川風土記 郡上市美並町

【福井県】

- 78 越前和紙 今立郡今立町五箇

- 91 神と紙——その郷のまつり 今立郡今立町五箇

- 101 たまはがね——子どもがひらいた古代製鉄の道 今立郡今立町

- 115 越前笏谷石——石と人の旅 福井市／坂井郡三国町、丸岡町／

吉田郡松岡町

【愛知県】

- 17 周防猿まわしの記録 犬山市

【三重県】

- 95 寝屋子——海から生まれた家族 鳥羽市答志

【和歌山県】

- 115 越前笏谷石——石と人の旅 高野山

【高知県】

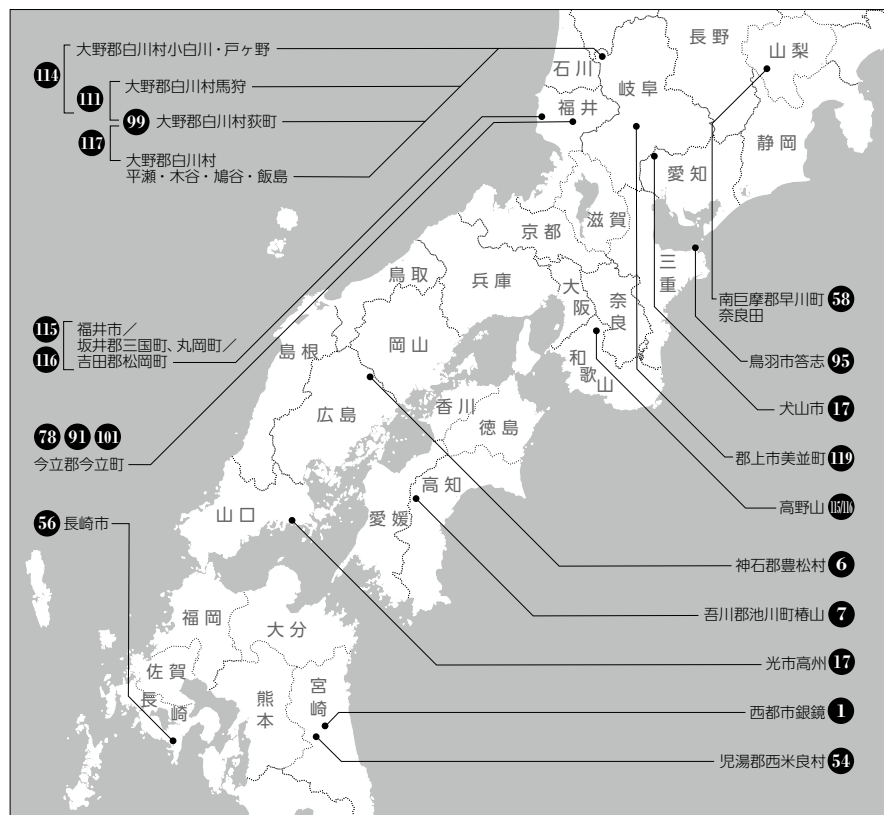
- 7 椿山——焼畑に生きる 吾川郡池川町椿山

【広島県】

- 6 豊松祭事記 神石郡豊松村

【山口県】

- 17 周防猿まわしの記録 光市高州



〔長崎県〕

56 わたしたちのまち・自然・いのち 長崎市

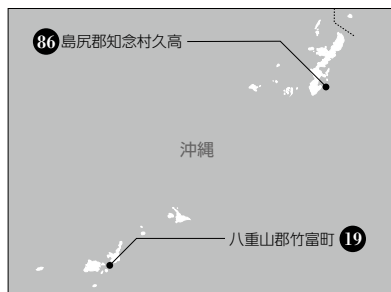
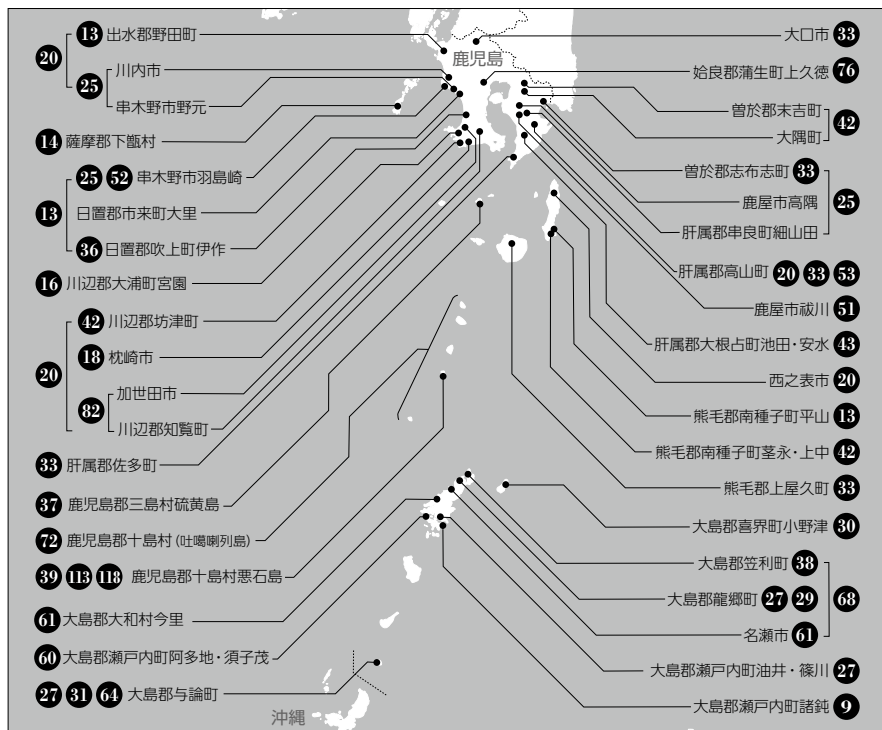
〔宮崎県〕

1 山に生きるまつり 西都市銀鏡

54 西米良の焼畑 児湯郡西米良村

〔鹿児島県〕

- 9 諸鈍シバヤ 大島郡瀬戸内町諸鈍
- 13 豊作の祈り 熊毛郡南種子町平山／串木野市羽島崎／日置郡市来町
大里、吹上町伊作／出水郡野田町上名
- 14 甕島のトシドン 薩摩郡下甕村
- 16 御伊勢講とほうそう踊り 川辺郡大浦町宮園
- 18 下園の十五夜 枕崎市下園
- 20 夏祭と十五夜行事 加世田市／西之表市／川内市／出水郡野田町／
肝属郡高山町／枕崎市／川辺郡坊津町、知覧町
- 25 大隅・薩摩の春まつり 鹿屋市高隅／肝属郡串良町細山田／曾於郡
志布志町安楽／川内市高江／串木野市野元羽島崎
- 27 奄美の豊年祭 大島郡龍郷町秋名、瀬戸内町油井篠川、与論町
- 29 竜郷のアラセツ——シヨチヨガマ・平瀬マンカイ 大島郡龍郷町秋名
- 30 喜界島の八月行事 大島郡喜界町小野津
- 31 与論の十五夜踊り 大島郡与論町
- 33 鹿児島島の正月行事 肝属郡佐多町、高山町／曾於郡志布志町／大口市
／熊毛郡上屋久町
- 36 伊作の太鼓踊り 日置郡吹上町伊作
- 37 八朔踊りとメンドン 鹿児島郡三島村硫黄島
- 38 佐仁の八月踊り 大島郡笠利町佐仁
- 39 ボゼの出る盆行事 鹿児島郡十島村悪石島
- 42 ホゼと願成就 熊毛郡南種子町荻水上中／川辺郡坊津町／曾於郡
末吉町、大隅町
- 43 大隅の柴まつり 肝属郡大根占町池田安水
- 51 祓川の棒踊り 鹿屋市祓川
- 52 羽島崎神社の春まつり 串木野市羽島崎
- 53 高山の水神まつりと八月踊り 肝属郡高山町本町
- 60 奄美のノロのまつり 大島郡瀬戸内町阿多地須子茂
- 61 奄美のノロのまつりその二 大島郡大和村今里／名瀬市大熊
- 64 まちゃん(待網漁)——与論島 大島郡与論町
- 68 奄美の泥染 大島郡龍郷町、笠利町／名瀬市
- 72 吐噶喇——七つの島々 鹿児島郡十島村
- 76 薩摩の紙漉き 始良郡蒲生町上久徳
- 82 薩摩の水からくり 川辺郡知覧町／加世田市
- 113 七島正月とヒチデー——鹿児島県十島村悪石島 鹿児島郡十島村
悪石島
- 118 竹の焼畑——十島村悪石島のアワヤマ 鹿児島郡十島村悪石島



65 カタロニアの復活祭 カタロニア地方(フランス)

26 アマルール 大地の人 バスク バスク地方(フランス/スペイン)

フランス/スペイン

86 イザイホー一九九〇年 久高島の女たち 島尻郡知念村 久高

19 竹富島の種子取祭 八重山郡竹富町

【沖縄県】

フィルム作品以外の 民映研作品及び刊行物

民映研は映画フィルムによる作品にのみ番号を付けて世に発表してきました。一九八〇年代になると、民映研でもビデオ作品が生まれてきます。初期の頃は、それまでのフィルム作品を生かしビデオに変換した博物館の展示用短編が主な作品群でした。ビデオ映像が普及してからは、ビデオ作品、テレビ番組など多くの作品を制作するようになります。作品番号が記載されていない貴重な作品も生まれました。

ビデオ作品

公共展示施設用VTR作品

〔国立民族学博物館〕

■ 1976 年

- No 1 狩りのまつり
- No 2 集落の連合と三十三番神楽の組立
- No 3 奥日向の地主信仰―土地を拓いた先祖のまつり
- No 4 西日本におけるカシのの実の食べ方
- No 5 木地師の小屋づくりと山の神まつり
- No 6 奥会津の木地師と手びきのロクロ
- No 7 クバの葉でつくった鍋とク

バの葉餅

- No 8 叩きの技術と野焼き
- No 9 焼きものガマの発達
- No 10 漆と漆かきさん
- No 11 輪島塗り 今と昔
- No 12 縄文土器のつくり方と使い方
- No 13 青森県上北地方のヒエ・ソバの食べ方と食器
- No 14 網代編みによる竹なづくり
- No 15 吉野・津軽の曲げものづくり
- No 16 沖縄・西表島の船漕ぎ競争
- No 17 沖縄・与那国島の豊年感謝祭
- No 18 中国山地における年越しと正月の行事―広島県豊松村
- No 19 中国山地における小正月と

とらへい―広島県豊松村

- No 20 中国山地における田の神迎えと田の神送り―広島県豊松村
- No 21 中国山地における荒神まつりとめぐり祈禱―広島県豊松村
- No 22 中国山地におけるかまと鎮めとかまとあげのまつり―広島県豊松村
- No 23 中国山地における太鼓田植え―広島県豊松村
- No 24 中国山地におけるコンニャクづくり―広島県豊松村

■ 1977 年

- No 1 南島の製糖技術―与論・沖

永良部

- No 2 南島の用水技術―与論・沖永良部
- No 3 日本の祭礼と芸能―与論の十五夜踊り
- No 4 離島の農業と交通―対馬鴨居瀬
- No 5 離島の漁業―対馬鴨居瀬の海人
- No 6 北海道・沙流川アイヌの結婚Ⅰ―嫁ぐまでの準備
- No 7 北海道・沙流川アイヌの結婚Ⅱ―儀礼と祝宴
- No 8 北海道・沙流川アイヌの家づくりⅠ―場所選定から屋根組

みまで

- No9 北海道・沙流川アイヌの家づくりⅡ―屋根ふきから仕上げまで

- No10 北海道・沙流川アイヌの家づくりⅢ―新築祝いと家の神まつり

■1978年

- No1 アイヌの熊送り(1)―祭場と祭具づくり

- No2 アイヌの熊送り(2)―イナウづくり

- No3 アイヌの熊送り(3)―酒・団子・こげ菓子づくり

- No4 アイヌの熊送り(4)―弓矢づくり

- No5 アイヌの熊送り(5)―客迎えから熊を射るまで

- No6 アイヌの熊送り(6)―熊の解体と熊の神を家に迎える

- No7 アイヌの熊送り(7)―熊の神の化粧

- No8 アイヌの熊送り(8)―熊の神を神の国へ送る

- No9 焼畑のむらの変遷と生業―高知県池川町椿山

- No10 焼畑の生業―高知県池川町椿山

- No11 山焼きと地ごしらえ―高知県池川町椿山

- No12 焼畑の作物(アワとヒエ)―高知県池川町椿山

- No13 焼畑の作物(大豆と小豆)―高知県池川町椿山

- No14 焼畑の作物(サトイモ)―高知県池川町椿山

- No15 焼畑の換金作物(ミツマタ)―高知県池川町椿山

- No16 豆腐づくり―高知県池川町椿山

- No17 焼畑における虫送りの行事―高知県池川町椿山

- No18 先祖まつりと太鼓踊り―高知県池川町椿山

■1979年

- No1 秩父の子育て行事(1)安産の祈りから出産まで―埼玉県長瀬町・吉田町

- No2 秩父の子育て行事(2)雪隠まわりからオグイゾメ(百日目)まで―埼玉県長瀬町・吉田町

- No3 秩父の子育て行事(3)ホウソウ

- ウ流しから帯とき祝い(七才)まで―埼玉県長瀬町・吉田町

- No4 飯島のトシドン

■1982年

- No1 南薩摩の十五夜行事

- No2 大隅・薩摩の打植えまつり

- No3 太郎太郎祭と船持ち祝い―鹿児島県羽島崎

- No4 佐渡の車田植

- No5 奄美の芸能・諸鈍シバヤ(1)―準備

- No6 奄美の芸能・諸鈍シバヤ(2)―開始禊からシシキリ(獅子退治)まで

- No7 奄美の芸能・諸鈍シバヤ(3)―ダットドン(座頭殿)から終曲まで

■1983年

- No1 奄美・喜界島の八月行事

- No2 秩父・吉田町の花まつり

- No3 アイヌの子どもの夏の遊び

- No4 アイヌの子どもの魚とり

- No5 バスクの概観と歴史

- No6 バスクの羊飼いの生活

- No7 バスクのチーズ作り

- No8 バスクの農村と信仰

■1986年

- No1 山に生きたる・越後奥三面―熊オソの構造

- No2 山に生きたる・越後奥三面―ドオ(筈)づくり

- No3 山に生きたる・越後奥三面―ゼンマイ小屋のくらし

【鹿児島県立歴史民俗博物館 黎明館】

- 硫黄島のメンドン／一九八二年／6分

- 悪石島のボゼ／一九八二年／6分

- 示現流と野大刀目顕流／一九八二年／5分

- 佐仁の八月踊り／一九八二年／5分

- 湯之元の太鼓踊り／一九八二年／5分

- 本町の八月踊り／一九八四年／5分

- 羽島崎神社の太郎太郎祭／一九八四年／7分

- 祇川の棒踊り／一九八四年／7分

〔川崎市市民ミュージアム〕

- 川崎・宮内の雨乞い行事／一九八七年／21分

〔大井町郷土資料館〕

- 川越街道と大井宿／一九八八年／8分／タイムアート・デザイン受託

〔群馬県館林市
市立田山花袋記念館〕

- 田山花袋(1)／一九八八年／5分
- 田山花袋(2)―田山瑞穂父を語る／一九八八年／5分
- 田山花袋(3)―花袋とその文学小林一郎／一九八九年／6分

〔龍ヶ崎市立歴史民俗資料館〕

- 龍ヶ崎の水と歴史／一九八九年

各地方自治体及び公共団体教材用VTR

〔岩槻市教育委員会〕

- 街並み探訪『城下町いわつき』／一九八九年／22分／タイムアート・デザイン受託

- ／11分／タイムアート・デザイン受託

- 撞舞／一九八九年／5分／タイムアート・デザイン受託

- オビシヤ―別所町／一九八九年／8分／タイムアート・デザイン受託

- ナラセモチと鳥追い―長仲町／一九八九年／3分／タイムアート・デザイン受託

〔東京都江戸東京博物館〕

- 種蒔き正月とフセギ／一九九一年／34分
- まちに生きる厄除の大蛇／一九九一年／30分
- 羅字屋／一九九二年／33分
- 武蔵野の富士講―丸嘉講武州田無組中里講社／一九九二年／45分

- 富士信仰と富士講―丸藤宮元講／一九九二年／45分

- 江戸川区の富士講―割菱八行講／一九九三年／46分

- 漉返紙／一九九三年／30分

- 檜原村の式三番―笹野の式三番／一九九三年／30分

- 神と食事をする人々―檜原村春日神社の御饗(おとう)神事／一九九四年／36分

- 檜原村の式三番―小沢の式三番／一九九四年／45分

- 山の獅子舞―檜原村湯久保／一九九四年／35分

- 下町にのこる念仏講―下谷竜泉木魚講／一九九五年／28分

〔埼玉県吉田町電勢会館〕

- 吉田町散歩／一九九二年／16分
- 小川の百八灯／一九九二年／5分

〔北口本宮富士浅間神社〕

- 北口本宮富士浅間神社の太々神楽／一九九一年／180分

- 電勢まつり／一九九二年／16分
- 電勢筒つくり／一九九二年／10分
- 電勢打ち上げ櫓／一九九二年／3分

- 塚越の花まつり／一九九二年／6分

- 大波見のどんど焼き／一九九二年／4分

〔ひめゆり平和祈念資料館〕

- 平和への祈り―ひめゆり学徒の証言／一九九四年／72分／NHKエデュケーショナルとの共同制作

- 平和への祈り―ひめゆり学徒の証言短縮版／一九九四年／20分／NHKエデュケーショナルとの共同制作

〔財〕青少年福祉センター〕

- みんなで歩こう―(財)青少年福祉センター30周年／一九九一年

／32分

【東秩父村教育委員会】

- 竹縄を伝承する―東秩父村／一九八九年／31分

【東洋英和女学院】

- 幼な子のように―保育者育成の

歩み／一九九二年／63分

【川口市教育委員会】

- 赤山洪／一九九三年／30分

【白川村教育委員会】

- 白川郷の合掌民家―技術伝承の記録／一九九四年／60分

● 世界文化遺産へ―白川村合掌集落／一九九四年／18分

- 旧田島家―技術伝承普及版／一九九四年／21分

- 白川郷・五箇山の合掌造り集落／一九九四年／16分

- 白川郷・五箇山の合掌造り集落（英語版）／一九九四年／16分

【沖縄戦記録フィルム1フィート運動の会】

- 1フィート映像でつづる―ドキュメント沖縄戦／一九九五年／57分／NHKエデュケーショナルとの共同制作

テレビ番組

【特集番組】

- 歩け三郎！／一九八二年放映／40分／朝日放送
- おれたちの村が湖底に沈む―新潟県朝日村奥三面／一九八四年放映／60分／朝日放送
- 若者宿で育つ―答志島寝屋子たちの青春／一九八七年放映／52分／名古屋テレビ
- 新発見筑紫哲也のカタロニアに究極の温泉とエスカルゴ料理のルーツを見た／一九八七年放映／90分／テレビ朝日
- 浜美枝・ビレーネ讃歌―バスクのまつりと鳩りよう大作戦！！／

一九八九年放映／90分／テレビ朝日

- パルセロナの青い空―知られざるカタルーニャの長い時／一九九二年放映／90分／テレビ朝日

- 日の神と伊勢海人族／一九九三年放映／60分／名古屋テレビ放送

- ETV特集 姫田忠義・果てしない記録の旅／一九九四年放映／45分／NHK教育放送

- 『第一夜 日本の基層文化を求めて』『第二夜 ビレーネの文化を見つめる』

- ETV特集 菅江真澄の世界／一九九五年放映／45分／NHK

教育放送／『第一回 北方日本人の旅立ち』『第二回 天・地・人の記録』『第三回 記せしことこの生命』

【親の目の目シリーズ
全国テレビ朝日系列放映】

- 花まつりの子どもたち／一九九九年／30分
- さよみちゃんとブナの山／一九九九年／30分
- 働き学ぶ16才の日々／一九九九年／30分
- 竹で縄を作る子ども達／一九九一年／30分
- ぼくらの家ができる／一九九一

年／30分

- 家出だけはしないで／一九九一年／30分

- チョゴリを着せて／一九九二年／30分

- 花で心を染めあげる―心障者学級の子どもたち／一九九三年／30分

外国語版映像作品

- アイヌの結婚式／英語版／16mmフィルム
- チセアカラ／アイヌ語版／われらいえをつくる／16mmフィルム
- チセアカラ／英語版／われらいえをつくる／16mmフィルム
- イヨマンテ／熊おくり／英語版／16mmフィルム
- イヨマンテ／熊おくり／仏語版／16mmフィルム
- 越後奥三面／山に生かされた日々／英語版／16mmフィルム
- 越前和紙／英語版／16mmフィルム
- 越前和紙／仏語版／VTR
- 越後奥三面第二部／ふるさとは消えたか／英語版／VTR

書籍等刊行物

『民族文化映像研究所発行刊行物』

- 民族文化映像研究所資料集No.1
アイヌの結婚式、チセ・ア・カラ／一九七四年
- 民族文化映像研究所資料集No.2
奥会津の木地師／一九七六年
- 民族文化映像研究所資料集No.3
豊松祭時記／一九七六年
- 民族文化映像研究所資料集No.4
椿山／焼畑に生きる／一九七九年
- 民族文化映像研究所資料集No.5
イヨマンテ／一九七九年
- 山に生かされた日々／朝日村奥三面の生活誌／一九八四年

- 越後奥三面／山に生かされた日々シナリオ集／一九八四年（一九九二年改訂）
- 民族文化映像研究所の歩み／一九八〇年（一九八五年改訂）
- 資料集カラムシと麻／一九八八年
- 民族映画を支えてくださったまなざし／一九九一年
- 15周年記念映像記録セミナー『奮』から『共生』へ―大地の文明を問う／一九九二年
- 深い日本―スウェーデン上映会の記録／一九九四年
- 資料集寝屋子―海から生まれた家族／一九九五年

『民族文化映像研究所製作刊行物』

- 野にありて目耳をすます 姫田忠義対談集1／一九九六年
- 野にありて目耳をすます 姫田忠義対談集2／一九九六年
- 佐渡の車田植／一九八一年／両津教育委員会発行
- 大隅・薩摩の春まつり／一九八一年／鹿児島県教育委員会発行
- 奄美の豊年祭／一九八二年／鹿児島県教育委員会発行
- 鹿児島島の正月行事／一九八三年／鹿児島県教育委員会発行
- 西米良の焼畑／一九八六年／西米良教育委員会発行
- 奈良田の生活と自然のつながり―焼畑を中心に／一九八七年／早川町教育委員会発行
- 鹿児島県文化財調査報告書第37集 民俗文化財映像記録保存事業シナリオ集／一九九一年／鹿児島県教育委員会発行
- 茂庭の焼畑／一九九三年／福島市教育委員会発行
- 合掌造り民家はいかに生まれるか―白川郷・技術伝承の記録／一九九四年／白川村教育委員会発行